

武蔵野日曜集会

葡萄樹

——ヨハネ伝第15章1～26節——

1995年5月7日

小池辰雄

どん底 無者 我に宿れ 聖書は宇宙的な書 我は火を地に投ぜん 霊体のひと 全存在で証する

【ヨハネ15・1～26】

1 我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。……

12 わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。……

26 父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証せん。

●どん底

賀川豊彦さんは本当にどん底を歩いて、貧しい人、苦しんでいる人、病める人の友となつて、キリストの愛をもつて接していった。ずいぶん人助けもした。しかも、彼は非常な勉強家で優秀であるし、知的にも意志の上でも信仰の上でも実に素晴らしいかたです。近代の日本のキリスト教界の第一人者は、私は文句なしにこの賀川豊彦だと思えます。賀川全集が24巻くらいあるから、賀川さんのものも親しんでみてください。彼はあらゆる面で活躍している。アメリカにも行っている。アメリカの方がむしろ日本よりもよく知られているそうです。私は賀川さんを敬愛してやまない。

内村鑑三の流れは——私が今やっているように——壇上から聖書の研究を語って、それでお終いのような、インテリ的なキリスト教の伝道でもあった。私の直かの先生の藤井武先生は自宅でなされたから、多少それとは趣きが違っていましたけれども。



しかし、本当は――階段教室というのがあるが、私が坐っていてあなた方がずーっと上の方に階段のように並んでいる――そうやって語る方が本当なんです。私がこうやって上から語るのには余りふさわしくない。階段教室というのは大変おもしろい。先生が一番低い所において、生徒が高い方にいる。集会所も本当は階段になっているといい。

●無者

「私は信仰なんかありません」

と私ははつきり言う。こつち側から信じ仰ぐような信仰は私にはない。人間の側から

「私は信仰をしています」

とか、

「私の信仰はまだで、もう少し聖書を勉強してから」

とか言う。そんな相対的な判断はもう要らなくなってしまった。

「私は何もありません」

と、正に無者なんだ。無者の最たるものはキリストです。

「われ何ごとも為しあたわず。私は何も言えない。父が言わせることを言っているだけの話だ。父の力でさせられているだけのはなしだ」

と、ヨハネ伝に書いてある。

「イエスというかたは無者である」

と私は言っている。キリストはゼロなんだ。キリストはゼロ（0）だと、これが無限大（∞）になる。神さまという無限大が入ってくる。だから、

「我を見しものは父を見しなり」

と仰った。

「自分は何ものでもない」

と言うひとが、

「私を見た者は神さまを、父を見たものである」

と言った。これは本当の言葉だ。我が無い、無我ということ。禅宗的に悟って無我になるのではない。悟りは要らない。もともと何ものでもないということ。

太陽の光によっていろいろな植物や動物が生きている。植物も動物も無者なんだ。太陽の光と熱がなかったら、みな死んでしまう。お天道さんはいへんなものです。太陽がなければ地球はない。太陽は絶対的な存在なんです。地球は太陽に在らしめられている。こつちから信仰するなんていうのではない。神・キリストの力に圧倒されて生きている。圧倒が恵みなんです。その力に、光に、生命に、愛に圧倒される。

「私の信仰」

ということを問題にするクリスチャンが大勢いるけれども、



「そんなものは考えるな、キリスト様に圧倒されていなさい」

と言いたい。彼の愛に、彼の力に、彼の生命に圧倒される。私はこの圧倒という言葉が好きだ。私は圧倒されて生きている。これは上から力が、光がくるから、疲れをしない。相対的自分の精神力とか肉体の力とかを問題にしているうちはダメです。そんなものは何も問題にしない。ただ圧倒される。そういうような角度の気合をどの牧師さんが語っているかというんだ。

「もつと信仰を深くしなさい」

なんて言っている、くたびれてしまう。

聖書の言葉もどうもまだ少しまだるっこい所がだいぶんあるな。あなた方、楽しいでしょ。本当の意味で楽しくなければうそだよ。

●我に宿れ

1 我は真の葡萄の樹^{まこと}、わが父は農夫なり。

キリストの言葉は意味ではないから、聖霊の中で読まなければ本当は読めない。これは、葡萄の木はあるのだけれども、

「自分が本当の葡萄の木だ」

という面白い言い方だ。

「私はいわば葡萄の木のようなものだ」

なんていう言い方はしない。

「我は真の葡萄の樹」

という。

2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。

「我にありて」という。本当に「我に在れば」、果を結ぶに決まっているんだけど、果を結ばない在り方は本当の在り方ではないから切られてしまう。

3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。

4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

「我に居れ」とは、

「我に宿れ」

という言葉です。

「わがうちに入ってこい、懐の中に入れ」

ということ。祈る時に、

「主さまー」

と祈る。もうあとの言葉はいらない。「主さまー」と言つて、自分の全身をキリストの中に



投げ入れる。そうすると、あとはただ「アーメン」だけだ。

「主さま！ アーメン。どうにでもしてください」

と。いろいろな具体的な問題は、キリストの中に入ると段々とけていく、解決していく。そんなことを心配する必要はない。心配が一番いかん。心配や思い煩いはいらぬ。キリストが、

「思いわずらうなかれ」

と仰った。

「主さま！」

と全身でもって叫ぶと——叫ぶというのは何も声を出すことではない。沈黙の叫びでいい。黙って叫ぶ——その叫ぶと同時にキリストの中に自分を投げ入れる。口で言っているのではない。全身をキリストの中に投げ入れる。これが「主さま！」という祈りです。

「主さま！」と言うと、この中に入ってしまう。それでもう力がきてしまう。あとは、「ありがとうございます、アーメン」だけ。

「いろいろな問題がありますけれども、あなたが全部これを良いようにやってくだ

さす」

と。「人がどう思うか」なんてことは考える必要はない。どう思われたっていいじゃないですか、どう扱われたっていいじゃないですか。

「ところが、どっこい」

というわけで、こっちが勝ってしまう。逆に相手を救ってしまう。男でも女でも老いたるも若きも、それがキリストに在ってはできるんです。

●聖書は宇宙的な書

5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

「なんじらは枝なり」とある。キリストは私たちの幹で、我々はキリストの枝である。だから、「私を離れたら、枝が幹から離れたら、何事も為し能わず」と、何もできない。その通りです。

キリストというひとは大変なひとだね、これは霊的現実だから。

「あの人キリストに入っているから、そうするとこっちは入れないか」

なんて、そうではない。キリストは霊的な存在だから、誰でも入れる。宗教の霊的な事柄というものは、自然科学的に考えたらダメです。歴史も超越してしまう。聖書を読むと、今から二千何百年前のイザヤとかエレミヤとかいう連中と現在の話すことができるわけです。現在の彼らの言葉を聞いている。古典として試みていない。我々にとって



は聖書は古典ではない。古典研究ではない。聖書は現在の書なんだ。聖書は永遠の書で、現在のな書だから現実なんだ。過去も現在化し、未来をも現在化する。希望の世界も現在に持ってきてしまう。過去をも現在化して、希望の世界もこっちへ持ってきてしまう。これを永遠的な現実、永遠の現在という。

こういう信仰的な現実——「信仰」という言葉は私は嫌いなんだけれども——というのは普通の人には分からんね。なぜ聖書を読まないか、なぜ聖書に來ないかと思う。そして、聖書に來ると、今度は一生懸命で意味を考える。意味ではない。現実だ。

困ったものだね、小学校から大学にいたるまで、先生方が教育するなら、聖書を本当に読まなければ教育なんかできない。聖書は世界的な書、宇宙的な書なんだから。原動力なんだ。普通の人は

「ああ、聖書か。キリスト教か」

なんていつて敬遠してしまう。そうではない。これは宇宙的なものだ。空気を吸っているだろ。そのように聖書を食らわなければダメなんだ。

「我を飲め、我を食らえ」

というキリストの言葉もある。

5………汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

「いや、少しはできますよ」

なんて言っただって、それはダメです。何もできない。できているようだけれども、本当はやっているのではない。そうすると、

「さあ、これは大変だ、キリストを離れてはいけないな」

なんて心配して一生懸命になる。人間的な一生懸命はいりませんよ、投げ出していけばいい。

「私はあなたから離れるわけにいかないではないですか。私はあなたの中に自分を投げ込んでいますよ。『我を離るれば……』なんて仰らなくたって、私は投げ込んでいますよ」

と、そういうふうに言わなくては。

6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。

「我に居らずば、火に投げ入れて焼いてしまう」と。

●我は火を地に投ぜん

また、キリストは別なところで面白いことを言っている。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて來れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～50)



「十字架に架かって贖罪をしたならば、霊的な私が現れて聖霊を降だす」ということです。その聖霊は「火」なんです。その「火を投ずる」土台は十字架です。¹³人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。という。

「私は十字架で生命を棄てる。お前たち一人一人のために贖罪の死をとげる。そうしたら、聖霊がくるぞ」

と。十字架を本当に受けとつたならば、この聖霊がくる。聖霊が来ないような受けとり方は、本当は受けとっていないんだ。

「祈って待っている、そうしたならば、霊が風のごとくやってくるぞ」と。使徒行伝に書いてある。

「⁷イエス言いたもう……⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん」(使徒行伝1:7:8)

とある。それで、聖霊を受けたペテロ、ヨハネが跛者に

「我らを見よ」と言った。

「¹昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、²ここに生まれながらの跛者かかれて来る。……³ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、⁴ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。⁵かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、⁶ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。⁷すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、⁸躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。」(使徒行伝3:1:8)

と。「ナザレのイエス・キリスト」という名というものは大変なものだ、実力を持った名だから、

「イエスさま、キリストさまー!」

と言ったならば、叫んだと同時に力が来るんです。同時に力が来ないような叫び方は本当の叫びではない。

● 霊体のひと

「復活」というのは、息を吹き返してまた生きたというのではない。霊体で現れること、霊現することです。これはパウロがコリント前書15章で言っている。

「³⁹凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚



の肉あり、⁴⁰ 天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光榮は地上の物と異なり。⁴¹ 日の光榮あり、月の光榮あり、星の光榮あり、此の星はかの星と光榮を異にす。⁴² 死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³ 卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、⁴⁴ 血氣の体にて播かれ、靈の体にて甦えらせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。」(コリント前15・39～44)

これです。「血氣の体」というのは、我々がもっている今の肉体のこと。それが「靈の体」に甦る。靈体になる。靈体として現れる。だから、我々は死なない。

「小池先生は死んだ」

なんて言ったら大間違いです、

「先生は靈体のひとになった」

と言わなくては。あなた方もみなそうですよ。靈体になる。パウロがちやんと言っている。このコリント前書15章というのは凄いよ、烈々たる文句だ。パウロは大凱歌をあげている。熾^{さか}んなるかなだ。パウロは本当に選^{えら}びの器です。パウロというひとは非常に劇的です。ヨハネはスーツとしている。女の方はヨハネ的なのが多い。男はパウロ的でなければダメだ。聖書くらい楽しい本はないですよ。教えではない。キリスト教ではないんだから。聖書は生命と光に満ちている。特に新約聖書は凄い。旧約では預言書です。旧約の預言書と新約の全部——特にキリストの直の福音書——は凄い。キリストは真理の具現者だからね。「キリスト教」なんていうものだから、教えだと思おう。困ったものだ。キリスト道です。道です。とにかく、一緒にキリストの中に入るような集会をしなかつたらつまらんものな。私のお説教ではないから。告白している。語るも聞くも同じことです。

●全存在で証しする

²⁶ 父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる真理の御靈のきたらんととき、我につききて証せん。

とある。「アレーテイヤ」(真理)という言葉はなにか観念的にひびくけれども、聖靈は豊かな真理をもっている。「真理」という日本語の訳はギリシヤ語の氣持を表していない。「本の」「実相」ということです。実の相^{すがた}をもっている。

「実相であるところの御靈の来たらんととき、我を証しせん」ということです。「我につききて証しせん」という訳ではなく、

「我を証しせん」

でいい。「につききて」という言い方は、なにか浮いてしまう。

「証」ということは大事なことです。身をもって身証する。身というのは全存在です。全



存在で証しする。口先ではない。

「初めに言葉あり」

とヨハネ伝に書いてあったら、ゲートルが、

「初めに行為あり」

とした。これは『ファウスト』の中に書いてある。初めに行為ありという。何かしてから、それから、ものを言う。ものを言うてから、したのではダメなんだ。まず、実際的に行動している。それから、ものを言う。これが本当の在り方だという。それはそうです。教師は自分で実存しなければ人を教える資格はない、というわけです。ただ研究してものを言っているのでは本当の教師ではない。

キリストに圧倒されている。キリストに、

「我に居れ」

と言われたら、

「あなたの中に入れますか？」

ではない。

「あなたにとつ捕まりました。とつ捕まってしまったから、もう逃げようがありません。

せん」

と、そういうような告白にならなければダメです。

「もう、逃げられません。あなたにとつ捕まってしまったから、しょうがない。行

きどころがありません」

と。そのかわり、キリストの内容は凄いから、このキリストにとつ捕まると一番自由になる。最大の自由になる。一番の自由なひとはキリストにとつ捕まった人です。とつ捕まると、何か不自由かと思うと、そうではない。これが一番の自由なんだ。そういう消息が身についてこないとダメですよ。それはキリストにとつ捕まっているわけだ。キリストという方はもの凄く自由な方だから、変幻自在です。いかなる範疇にも入らない。いかなる限定もできない。無限定のひとだから。

そういう無限定の世界が好きなのは、ドイツのゲートルです。ゲートルというのはいろいろな面をもった人だけれども、やはり凄く。イタリアのダンテ、ドイツのゲートル、フランスのユーゴ、イギリスのミルトンやブラウニング、デンマークのキルケゴール。こちらでは西郷隆盛。あれは凄く。大人物です。別な意味では吉田松陰が凄く。それから近代では賀川豊彦。私はいろいろなのを相手にする。いわゆる歴史的に偉いとか偉くないとか、そういうことではない。魂の通ずるような、気合のかかっているようなのを相手にしている。だから、私の詩はおもしろいですよ。

